

大学共同研究成果報告

1. 和食と認識する料理のとらえ方と家庭における料理の伝承と食事づくり力の関連～大学生とその親世代の世代間の違い～

(研究期間 令和元年度～令和4年度)

1) 構成員

研究代表者

女子栄養大学

専任講師 駒場千佳子 (栄養学部)

研究分担者

女子栄養大学

教授 松田 康子 (栄養学部)

准教授 衛藤 久美 (栄養学部)

助教 神保 夏美 (栄養学部)

東都医療大学

准教授 宮下ひろみ (管理栄養学部)

帝京平成大学

助教 野原 健吾 (健康メディカル学部)

2) 研究実績の概要

【目的】本研究の目的は、和食と認識する料理の捉え方と、家庭における料理の伝承と食事づくりの関連を検討することである。

【方法】令和3年度は、女子栄養大学と東都大学で管理栄養士・栄養士養成課程の1年生とその保護者を対象に、質問紙調査(留め置法、一部郵送法)を実施した。保護者には、学生経由で依頼文書と調査票を配布し、紙又はウェブ(Microsoft Forms)で回答を依頼した。本研究は、女子栄養大学研究倫理委員会(第302号)、東都大学研究倫理委員会(R0112)から研究実施の承認を得て実施した。363組の大学生・保護者に配布し、大学生は326名から回収(回収率89.8%)、保護者は289名から回収(回収率79.6%)した。本年度は、大学生のデータを用い、調理に対する自信に着目した分析を行った。男性5名、回答に不備がある者2名を除外した319名(有効回答率87.9%)を解析に用いた。統計解析は、 χ^2 検定、Fisherの正確確率検定、Mann-Whitney U検定、t検定を用いた(統計解析ソフト:SPSS Statistics 28, 有意水準:5%)。

【結果】調理の自信で大学生を2群(調理自信高群196名[61.4%], 低群123名,[38.6%])に分けた。2群間に、年齢、同居家族、暮らしのゆとり、卒業高校学科で、有意な差は見られなかった。

1. 調理に対する自信と食事づくり力の関連

食事づくり力因子Ⅰ(中学校時代の主体的な食事づくり経験7因子)及び食事づくり力因子Ⅱ(小学校時代の食事づくりの手伝い4因子)の得点は、調理自信高群が有意に高かった。

2. 現在の食行動・食態度との関連

調理自信高群は、有意に、主となって調理を行う頻度が高く、調理をすることが好きで、大切だととらえていた。

3. 料理の伝承経験との関連

家族と料理に関する会話をすることが多く(料理の名前、作り方、食材を聞いたり話したりする)、家の料理を伝承されたととらえている者が、調理高群に有意に多かった。

2. 栄養士・管理栄養士養成課程における包丁技術習得のための指導方法の検討

(研究期間 令和2年度～令和4年度)

1) 構成員

研究代表者

女子栄養大学

准教授 児玉 ひろみ (短期大学部)

研究分担者

女子栄養大学

教授 小西 史子 (栄養学部)

教授 豊満美峰子 (短期大学部)

助手 鈴木布由実 (短期大学部)

2) 研究実績の概要

本研究は、栄養士・管理栄養士養成課程に入学した学生を対象に、包丁技術の記録観察および切断物の計測を対面により実験するものである。研究初年度である令和2年度は、新型コロナウイルス感染症の影響により対面での実験を行えなかったため、令和3年度の状況に応じてこれらの実験を行う予定としていたが、引き続き対面での実験実施が難しい状況であったため、研究期間のうち令和2～3年度は本実験を実施できていない状況であった。

実験項目は、包丁での切断動作(大根の半月切り)を、チェック項目(包丁の持ち方、切断物の押さえ方、包丁の動かし方、包丁の刃の使用部位)に沿って記録し、一定時間(30秒間)に切断した枚数、厚さ、厚さの均一さの計測をするものである。

これらを、包丁技術の指導前後、指導方法A(包丁の動かし方中心の指導)と指導方法B(切断物の押さえ方中心の指導)、同様の実験を行った過去の結果と比較して解析し、栄養士・管理栄養士養成課程に入学する学生の入学時点での包丁技術習得度の変化、指導方法の違いによる包丁技術習得の状況を明らかにし、学生の現状に適応したより効果的な包丁技術の指導方法を検討するこ

とが研究目的である。

令和2～3年度については、先に述べたように対面での実験が難しい状況であったため、過去の結果について切断物の計測実験とともに実施した質問紙調査（栄養士・管理栄養士養成課程に入学前の包丁の使用経験等について）の結果を改めて見直し、令和4年度の本実験にむけて準備した。

令和4年度の9～10月に、短期大学部1年生（調理学実習を半期履修後）を対象として、指導法AおよびBによる切断物計測の実験を実施することができた（女子栄養大学研究倫理委員会承認425号）。ここで得られた実験データは、1年後の短期大学部2年生で実施する切断物計測の実験結果と併せて解析し、包丁技術の定着度を評価する。